ヨハネ13章1節「ご自分のものを愛された主」

1A 親密さ

1B Mission Huddle と Conference

2B 遣わされる人々

3B お使いに行く子ども

2A 過越の食事 13:1-15

1B 使命を果たされたイエス

2B 最後までの愛

3B 仕える主

1C 愛による奉仕

2C 利用する「愛」と「仕える愛」

3A 食事から離れるユダ 13:16-38

1B 近しい食事

2B 交わりにいられない罪人

3B 去った後に語られるイエス

4B 愛による世への証し

4A 世を去った後にもある親密さ 14 章

1B 再び来られることにおいて

2B いっしょにおられたことにおいて

3B 祈り、戒め、御霊

1C 何でも聞かれる方

2C みことばによる愛

3C 孤児にしない助け主

4C 世にはない平安

5A 親密さから来る実 15 章

1B ぶどうの木と枝

2B みことばによる喜び

3B 友のためにいのちを捨てる愛

4B 主による選び

1C 残る実

2C 選びを憎む世

6A 世における助け 16 章

1B 世の誤り

2B 喜びに変わる悲しみ

3B 父ご自身の愛

4B　世に打ち勝つ方

7A　父への祈り　17 章

1B　一つにある栄光

2B　世で聖別される弟子

3B　一つになる私たち

本文

今朝は、ヨハネによる福音書 13 章から 17 章までを、一気に見ていきたいと思います。その始まりになる、13 章 1 節をお読みします。「さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」

1A　親密さ

1B　Mission Huddle と Conference

私たち明石は、5 月 19 日から 25 日まで、カリフォルニアのカルバリーチャペルにおけるイベントに参加しました。19 日から 22 日は、Mission Huddle という、カルバリーチャペル・コスタメサにおけるイベントで宣教師たちが集まり、分かち合いと祈りの時を持ちました。22 日から 25 日が、CGN、すなわち Calvary Global Network という、カルバリーチャペル全体の集会です。

私たちが、なぜカルバリーチャペルに導かれているのか、改めて確認する時となりました。そこに、愛があるんです。互いにすぐに親密になります。その、不思議な御霊にある愛に触れて、ひきつけられて、カルバリーの仲間になっていることに気づきます。

2B　遣わされる人々

そして次に、これらのイベントが終わり、今、このようにして日本に戻ってきています。世界各地から、同じようにアメリカの南カルフォルニアに集まってきて、この親密な交わりをし、それぞれの場所に遣わされます。イエスが、集まっている弟子たちに言われました。「ヨハ 20:21 平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

3B　お使いに行く子ども

これはちょうど、どう言ったらよいでしょうか、「お使いに出ていく子ども」のようなものです。子どもは、家の中で安心しきっています。家に留まっていることは、父や母に完全に頼り切っています。その親密な交わりから、お使いを頼まれます。それで、しなければいけないことをするのです。

イエス様が、「父がわたしを遣わされた」と言われたのはそういうことです。主は、父なる神のふ

ところにおられました。そこから遣わされた、地上に来られました。今や、十字架につけられ、三日目によみがりました。そして、間もなく永遠の父の栄光の中に帰ります。同じように私たちは、神を父とする家において、その親密な交わりがあり、そこからそれぞれ置かれているところに遣わされ、そして、またイエスの御名によって集まり、その交わりを楽しみます。

2A 過越の食事 13:1-15

そして、これが主が、二階の大広間で、弟子たちと最後の過越の食事をした時に語られたことです。もう一度、13 章 1 節を読みましょう。「さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」

1B 使命を果たされたイエス

主は、間もなくご自分の使命である、「人々の罪のために死なれ、三日目によみがえり、そして父のみもとに行く」という使命を果たされます。

2B 最後までの愛

そしてこれまで、弟子たちと同じ釜の飯をお食べになり、その時が最後に近づきました。それで、主は、「世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された」とあります。最後は、究極まで愛されたとも訳すことができます。「ご自分の者たち」と言っていますね。主は父なる神から、これらの弟子たちをご自分にものとして与えられました。その彼らを、最後に愛し尽くされたのです。これほど、親密な時はないでしょう。

そこで私たちは、ヨハネ 13 章から 17 章まで、親密というテーマで、主がこれから行われること、語られることを見ていくことになります。ところで、私はこれまで、ここにある主のことばを、一つ一つの教えとしては知っていましたが、全体の流れとしてあまり捉えていませんでした。今朝は、全体の流れとして見ます。流れているのは、主ご自身の弟子たちに対する親愛です。親密な愛です。

3B 仕える主

1C 愛による奉仕

私たちが、互いに親密に交わるにはどうすればよいでしょうか？それを示されたのがイエスです。弟子たちの足を洗われたのです。そして、こう言われました。「13:14 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」互いに、足を洗いなさいと言われました。当時、家に入る時は、サンダルで歩いているので埃だらけになります。その足を洗うのは、しもべのすることでした。しかし、今、弟子たちはだれもしなかったのです。しかし、主が率先して、弟子たちの足を洗われました。しもべのように、仕えられたのです。そして、「わたしは主であり、師でもある。であれば、それを模範にして、互いに仕え

合いなさい」と言われます。

私たちが、主にあって互いに親密になっている時は、自分のことよりも、相手を尊ぶ、へりくだった、仕える心を持っている時です。互いに仕える時に、そこに親密さが現れます。

2C 利用する「愛」と「仕える愛」

ロマ 12 章には、こう書いてあります。「12:9 愛には偽りがあってはなりません。」愛にも偽りがあります。どのようなものかと言いますと、私たちが集まる時に、自分の必要を満たすために、人々と付き合うことです。

自分がさみしいから、そのさみしさを満たしてもらうために、いろいろな活動をします。自分が認められていないから、認めてもらうために、いろいろ動きます。自分は主のためにしているとか、人々のためにしているとか言いながら、実はそれらの動きや活動を利用して、自分の欲求を満たすために行うときです。あるいは、「これがない。あれがない」と不満を漏らします。「あの人はこういった、ああいった」と被害者意識を募らせます。主に仕え、人々に仕えるのではなく、自分自身に仕えるために、人々を利用してしまうのです。そうすると、私たちの間の愛は冷えて、親密さがなくなるのです。しかし、私たちがそのような偽りを捨て、相手を自分よりも尊いとみなすとき、そこに暖かい兄弟愛が生まれるのです。

3A 食事から離れるユダ 13:16-38

1B 近しい食事

この時に、最後の過越の食事をしています。私たちは、この親密さが今の食事ではなかなか見出されないです。私は、コロナ渦の時に、霊的にとても苦しみました。「三つの密」を避けるという言葉が使われましたね。これはまさに、主が設けられた親密さを壊すものです。ユダヤ人たちは、コの字になった、お膳に向って、横たわります。座って食べず、横たわります。そして出てくる食べ物は、パンは一つのパンを裂いて、回して食べます。ぶどう酒の杯は、一つの杯を飲みかわします。イエスの隣に座っていたヨハネは、「13:25 その弟子はイエスの胸元に寄りかかったまま」という言葉を使っています。文字通り、主の胸に寄りかかるような位置に横たわっていたのです。

2B 交わりにいられない罪人

しかし、そこには罪人はいることはできません。「詩 1:5 それゆえ悪しき者はさばきに 罪人は正しい者の集いに立ち得ない。」ここで言っている「罪人」とは、主イエスに愛され、この方を信じている者たちの間に、イエスの愛を知らない者たちのことを言っています。罪赦された者たちの集まりには、主の愛があり、聖めてくださっています。ですから、主への信頼がない者がそこにいれば、物理的にはそこにいても、居心地が悪くなるのです。

イエスがパン切れをユダに渡しました。こう書いてあります。「13:30 ユダはパン切れを受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。」これから、最後の晩餐にあずかるのですが、途中まで食事をしていたユダは、続けてそこにいられなくなり、去っていきました。

3B 去った後に語られるイエス

それで、ユダが去ったので、ようやく主は、弟子たちに、ご自分のものとされている者たちへの愛のことばを降り注がれるのです。13:31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました。」主は、ご自身が去っていくことを語られました。

4B 愛による世への証し

そして、戒めを与えられます。「13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」イエスが、こよなく弟子たちを愛しておられました。弟子たちは、そのことをよく知っていました。その愛をもって、互いに愛し合いなさいと言いつけられます。まず、これが一つの戒めです。

この戒めには、約束があります。「13:35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」愛し合っているうちに、それが世に対して、証しになっているのです。人々が、求めているのは愛です。それを世においては、神以外のものに代用しているのです。でも満たされない。しかし、私たちが愛し合っている所を見て、それで、ここには愛があると気づくのです。

カンファレンスでも、「愛こそが私たちの教会戦略」と言っていたスピーカーがいました。教会は、ああだこうだ、これこそが成長するためのプログラムだと攻略するのですが、結局のところ、私たちの間に愛があることが、人々を集まりに引き付けるのだよということです。

4A 世を去った後にもある親密さ 14 章

そして主は、ご自身が去っていくことを語り、ペテロにも、「あなたは、わたしのところに付いていくことはできない」と言われました。ペテロはいつまでについて行く、いのちも捨てると言ったのですが、鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言うと言われました。そこで、主は、心が騒いでいる彼らに、数々の慰めのことばを語られるのです。その約束が 14 章です。

1B 再び来られることにおいて

一つは、「わたしは再び戻る」ということです。「14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わた

しがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」主は父のところに戻られたら、見てください。「場所を用意する」と言われます。共に住む、住まいを用意すると言われています。また、親密なところに来ることができるのだよ、と言われます。

そして、用意ができたら、また来て、迎えるからと約束されます。すぐにまた会える、そして父なる神の住まいに住める、その親密な交わりのところに戻れる！という希望です。

2B　いっしょにおられたことにおいて

そして、弟子たちは、「あなたは、どこに行くのですか。道が分からない。」というので、主は、「わたしが道ですよ」と言われます。また、「主よ、私たちに父を見せてください。」とお願いしますが、主は、こう言われます。「14:9a ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。」イエスは、彼らと長い間、一緒におられました。その時にすでに、イエスによって父なる神を見ていたのです。道についてもそうです。どこに行くのか分からないではなく、イエスこそが道です。

主は、弟子たちと一緒におられるというところに、すべてがあります。この親密な交わりのあるところに、すべての道、真理、いのちがあります。そこに、神を知る決め手があります。

3B　祈り、戒め、御霊

そして、その親密さを保つ約束を数多く行われます。

1C　何でも聞かれる方

一つは祈りです。しかも、その祈りは、「何でも聞かれる」というものです。「14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。」これはまさに、子が父に求めたら、何でも聞かれるようにする約束です。父は、愛する子のためなら何でもしたいと願いますね。それと同じです。イエスは、御父に対してそのような関係を持っておられます。それを、ご自身の名によって、弟子たちにも与えるという約束です。私たちは、この祈りの恵みにあずかっています。

2C　みことばによる愛

次は、みことばです。「14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」私たちが、主との親しい交わりを保つのに、その語られたことをきちんと守るということです。戒めを大切にしている中で、主の愛、そして、父の愛に触れるのです。

カルバリーチャペルの教会が大切にしていることが、これですね。「みことばに触れて、それを大

切にして、そこに流れている神の愛を知る」ということです。みことばが、何か義務的に守らなければいけない規則でもないし、小難しい知識を得る場でもないし、あくまでも、主の愛に触れていく過程なのだということです。

3C 孤児にしない助け主

そして次に、聖霊の約束です。「ヨハ 14:16-17 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。17 この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。」

もうひとりの助け主とありますが、主がこれまで助け主でした。いつも近くにおられて、いろいろな必要に答え、助けになってくださいました。けれども、これからは、父なる神の権威によって主が遣わされる助け主、すなわち御霊が、助けてくださいます。これで、孤児のように置き去りにされると言うことは全くなくなります。そして、主の教えられたこと、そのみことばの真理は、御霊によって私たちが思い起こすことができるのです。みことばは、聖霊の働きによって、私たちの血となり、肉となるのです。そして最後に、このようにして、御霊がともにおられて、親密に交わってくださいます。

4C 世にはない平安

そして、こうやって約束が与えられているので、14 章 27 節、「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。」主の平安は、世が与える者とは違います。世においては混乱があり、不安があります。しかし、そういった時にさえ与えられる平安です。

5A 親密さから来る実 15 章

そしてイエス様は、場所を移られます。ゲッセマネの園に行かれます。その時に、おそらく神殿の敷地を取られたのでしょう。神殿の建物や敷地には、ぶどうの彫刻があります。あるいは、ぶどう園そのものがあったのかもしれません。いずれにしても、その通りすがりにあった、ぶどうの木をつかって、ご自身のところに親しくとどまっていることを教えられたのです。

1B ぶどうの木と枝

それが、ぶどうの木と枝です。枝が、木につながって、それで実を結ぶように、主とそのみことばにとどまっていることによって、多くの実を結びます。主との親しい交わり、また主にある互いの親しい交わりにいることによって、初めて実を結ぶのです。

時々、自分が何かできることがあって、それをこの教会で用いてもらいたいと願って、いらっしゃ

る方々がいます。私は丁重に、「ぜひ、教会で交わりを楽しんでください。」とお願いします。何かをするのは、私たちの間におられる主に留まることによって、後から実として結ばれるのです。何をする時も、私たちは祈りによって時間を過ごして、主との交わりの中で、みこころを知るのです。そうやって、とどまるというところに、何かが生まれます。

2B　*みことばによる喜び*

そして主は、みことばに留まる中で、喜びが生まれる約束を与えられました。「15:10-11 わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」私たちは、みことばを聞いて喜んでいる交わりです。みことばによって、満ちあふれる喜びがあります。

3B　友のためにいのちを捨てる愛

そして、主は、「友」という言葉を使って、親密な仲にある愛を教えられます。「ヨハ 15:13 人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」そして主は、弟子たちをご自分の友と呼ばれるのです。これほど親しくしてくださっています！そして、事実、友である弟子たちのために、ご自分のいのちを捨てて、愛を示されたのです。

4B　主による選び

そして主は、弟子たちがご自分を選んだのではなく、イエスご自身が彼らを選ばれたことを話されます。「15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」選ぶというところには、だれが主体かが示されています。もし弟子たちが主を選べば、弟子たちが主体です。自分がイエスを自分のラビ。教師に選んだということになります。けれども、イエスが弟子たちを事実、選ばれました。それで、主体は主ご自身なのです。

1C　残る実

なので、その実は残るのです。主が選ばれ、主が遣わされるので、主ご自身が実を結ばせてくださいます。そしてその実が残るのです。ですから、選びと召しを確かなものにすることはとっても大切です。「Ⅱペテ 1:10 ですから、兄弟たち。自分たちの召しと選びを確かなものとするように、いっそう励みなさい。」自分が召されている、選ばれていると知る時に、自分の課題は何をするかではなく、自分の主人であるイエスを見つめ、この方といっしょにいることが重要だと知ります。そして、自分が何かをするのではなく、あくまでも主が自分によって行われることが全てだと知ります。

2C　選びを憎む世

そして、主が選ばれて、自分は主のものとなっているので、世は自分を憎むと警告されました。「15:18-19 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを知っておきなさい。19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」

私たちが受ける反発、無視などはすべて、自分が主のものとなっているからに他なりません。自分に対して憎んでいるというよりも、自分が選ばれ、主のものとされているところを妬み、憎んでいるのです。私の父と母は、正直に、私のバプテスマを見て、授けた牧師に言いました。「イエスが、清正を私たちから取っていった」と。イエスのものとされたということで、反対されるのです。ですから、自分のことを憎んでいると受け取らず、むしろ、本人がイエスに直面しなければいけなくて、それでもがいている、葛藤していると受け止めると良いです。

6A　世における助け　16 章

そして主は、16 章で具体的に、弟子たちが迫害されることを前もって語られます。

1B　世の誤り

しかしすばらしいことは、ともにおられる、もうひとりの助け主、御霊が、その反対の中にあって、証しを立ててくださることです。「16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。」私たちが、敵対的な世にあっても、そこで聖霊が働いてくださり、人々に罪について、義について、さばきについて誤りを明らかにしてくださいます。主がともにおられる、親密な交わりがあるというところで、この証しの力が与えられます。

2B　喜びに変わる悲しみ

そして、私たちは世にあって悲しみがあります。迫害によってクリスチャンも死にます。今、弟子たちは、主が十字架につけられるのです。けれども、決して喜びは取り去られません。むしろ、母が子を出産するように、悲しみや痛みは、喜びに取って変えられるのです。「16:22 あなたがたも今は悲しんでいます。しかし、わたしは再びあなたがたに会います。そして、あなたがたの心は喜びに満たされます。その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。」

3B　父ご自身の愛

そして、迫害を受けていても、父なる神ご自身の愛を経験します。「16:27 父ご自身があなたがたを愛しておられるのです。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからです。」

4B　世に打ち勝つ方

そして最後、弟子たちに対して言われた言葉は、「世に打ち勝つ」であります。「16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」私たちは、世において悪が荒れ狂う時代に生きています。しかし、どんなことが起こっていても、主がすでに世に打ち勝っておられるのです。この勝利に、私たちは平安を得ることができます。

7A　父への祈り　17 章

そして主はすぐに、目を天に向け、父に語られます。弟子たちの前で、天に目を向け、語られています。だから弟子たちも聞いている中で祈られているでしょう。

1B　一つにある栄光

主がまず祈られたのは、ご自身についてです。「17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」主の栄光が、父と一緒にいた時にあった、世界が始まる前の栄光です。そうです、父と子が一つであるところ、一緒にあるところに栄光があったのです。そして今もあります。父は子を愛し、すべてのものをくださいました。そして子は父の言われることだけを行い、父を示しました。その一体性に、栄光が現れます。

2B　世で聖別される弟子

そして次に、弟子たちのために祈られました。世において、世の影響を受けることなく、守られることです。「17:11 わたしはもう世にいなくなります。彼らは世にいますが、わたしはあなたのもとに参ります。聖なる父よ、わたしに下さったあなたの御名によって、彼らをお守りください。わたしたちと同じように、彼らが一つになるためです。」弟子たちが、聖なる父によって守られます。真理のことばによって、聖別されています。

3B　一つになる私たち

そして最後に、弟子たちによって、主のものとなる人々のために祈られています。すなわち、私たちのことです。「17:21-22 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。22 またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。」

主が私たちのために祈られたのは、この親密さです。父と子が一つであり、そこに神の栄光があるように、私たちも一つになり、一つになることで神の栄光が現れます。私たちにある、キリストの愛と親密さ、みことばへの愛、喜び、そして聖霊の助けによる力、世に対しても打ち勝つ証しの力があります。